

東アジア・インターナショナル・スクールライブラリアンズ・フォーラム2018に参加して

家城 清美（同志社大学嘱託講師）

アジア諸外国・地域のライブラリアンの現状やライブラリアンの専門的活動（授業）を学ぶために、東アジアインターナショナル・スクールライブラリアンズ・フォーラムが、2018年3回開催された。毎回のテーマは、ライブラリアンの活動のある部分に焦点が当たっているものであった。講師はインターナショナルスクールのライブラリアンであったり、国際バカロレア認定校のライブラリアンであった。私は修士号を有する海外のライブラリアンは、どのような専門的な活動をしているのか、またどのような待遇であるのかを知りたいと思い参加することにした。

1回目、2回目の講師の女性二人はパワフル、3回目の男性はソフトな雰囲気ですべてに富み優しい感じだった。私は、この三人の講師の発表やワークショップに、各回とも異なった視点からの感想を抱いた。

6月2日に実施された1回目のフォーラムの講師 Katy Jean Vance さんは、横浜インターナショナルスクールのライブラリアンで、学校図書館の経営ができる人だった。着任して、彼女はまず、資料を更新し、書架を壁面などに移し、児童・生徒が使う机・椅子と道具を収納できるスペース付きのワークルーム（メーカースペース）を図書館の真ん中に設えた。そこには、児童・生徒中心という教育思想が具現化されていた。児童・生徒中心つまり、児童・生徒の活動中心＝アクティブラーニングを念頭においたレイアウトに改められていた。既成の構造の中で、全体を変更するのは難しいものであるにもかかわらず、短期間で図書館はつくり変えられていた。私は彼女の手腕に感銘をうけた。彼女自身現在の広さに満足しているわけではなく、機会あれば、さらなる図書館を目指し、スペースの拡張を狙っていた。常に、より良いものと思う気持ちの強さを感じた。彼女にはライブラリアンとしての任務を明確に理解し、それを具現化していく力強さを感じた。学校図書館を運営する能力は、学校図書館を機能させるうえで最も重要なライブラリアンの資質だと思う。さらに、彼女のバックグラウンドにも因るのかと思うが、懐の深さを感じた。モンテッソリー中等教育学校でのライブラリアンの経験や南アフリカ共和国での経験があり、多様な文化にも理解があるように思った。それはワークショップでの彼女の立ち居振る舞いに表れていた。

ワークショップでは、彼女は参加者に課題を出し、ホワイトボードに課題に関するキーワードを書き込み、ワークシートを配付した。参加者の発言力を引き出すような支援ぶり、まさにライブラリアンがファシリテーターとしての役割を担っていることを感じた。

7月28日に実施された2回目のフォーラムの講師 Annie Tam さんは、香港でライブラリアンをしている。ライブラリアンがあまり認識されなかった時代のことを知っていて、いかにライブラリアンはあるべきかを追求しているように感じた。ライブラリアンの不遇時代を知っている人は、逆境に強いと感じた。今、徐々にライブラリアンが認知されてきている中で、彼女は読書教育に力を入れていた。探究学習が重要とされる今日、いろいろな科目で、読んで、内容を理解することが重要になる。読書というよりは、どちらかと言えば読解指導に近い活動をしているように思えた。私達参加者にはフォーラムに臨むまでに、『不思議の国のアリス』を読んでおくようにとの課題が出された。そして、当日私たちも Accelerated Learning というアプリで英文の読書力テストを受けた。私はコンピュータで読書力を計ら

れるのに抵抗があった。しかし、彼女が使用しているアプリを見ているうちに、児童・生徒の読書力に関するビッグデータをこのアプリ Accelerated Learning から構築できるのなら、児童・生徒の読書行動や読解の分析が可能になるのではと思った。それで、児童・生徒個人個人に対応できるカリキュラムや授業の改善に繋がられるのなら、これも良いのかもしれないと思うようになった。いいなと思ったのは、読書力テストの結果を教員や保護者と共有していることだった。読書において、今や彼女は教師だけでなく、保護者からも頼られている存在だと言っていた。教員や保護者は、彼女が図書館を離れているとき、彼女を探し出してまでも読書相談をして来るのだ。私は教師や保護者にまで、児童・生徒の読書法や読書の改善方法を求められ、頼りにされているライブラリアンが素晴らしく羨ましいとも思った。日本でそのようなことがあるだろうか。

国柄もあるのかと思うが、最新のもので、良さそうと思うものはどんどん取り入れていく国と、前例のないものに関しては、慎重な議論を経てからでないといけない国との違いなのかもしれない。

「学校で使っていないくても、社会に出たら必然的に使う。だから、学校で使わせる。」は9月22日に実施された3回目のフォーラムの講師であるライブラリアン Bingqing Zhao さんの言葉である。彼の学校では、児童・生徒はスマートフォンを校内で使用することが許されているそうだ。彼は、授業に使えるようなアプリをたくさん知っていて、有料・無料のアプリで使えるようなものを使っていた。授業では論語を教える時に、児童・生徒にアプリを使わせて論語の主旨を踏まえたストーリーを作成させると言っていた。

ワークショップでは、無料のストーリー作成ソフト Storyboard That を使ってみるグループに参加した。登場させる人物、場所、建物、吹き出しなどは用意されていて、人物の髪、肌、服装の色は用意されているパレットから選択できた。もっと自由に描いてみたいと思う人もいるだろうと察しはつくが、よく見ると人物の服装は時代を反映しているものもあった。使い方によっては、例えば歴史の授業で、児童・生徒たちは時代考証にも取り組んだストーリーが作成できるのではと思った。また、彼が言っていたように、アイデアはあるが絵を描くのが苦手な児童・生徒は、ソフトを使うことで課題に取り組みやすいと思った。

機器の動作環境によって、アプリの動きに問題はあがあるが、教師の創意工夫によってソフトを使うことで、児童・生徒が興味を持つ授業内容を作ることができると思った。彼はどのような年齢層にどのソフトが向くか、またどのような授業で効果があるかを把握していた。「どうして、こんなにたくさんのソフトを知っているのですか。」と問いかけると、先ず、自分がこういうソフトを扱うことが好きなこと、そして教師同士で情報を交換するとも言っていた。「授業の質を高めるソフト」というキーワードでライブラリアンが教員と繋がっていることを感じた。勿論、ソフトを用いることで授業とは関係ないことをする児童・生徒もいるようだが、それでも、彼は使ってみなくてはという思いの方が強いようだった。

今回のワークショップでは、情報化が、彼らの学校の中に深く入り込んでいる様子を感じた。自主的に考え（読解も含む）、自主的に何かをする、そのためにコミュニケーション能力が重要と日本でもよく言われることだが、彼らの国では多層的に情報機器が活用されている。ただ単に授業で情報機器を使用させるだけでなく、教師が選んだソフトを使わせたり、教師が児童・生徒の能力を開発するという一歩踏み込んだ情報機器の活用をしていた。

児童・生徒一人一人を支援し、情報メディアを活用しながら彼らの個々の能力を伸ばす一方で、彼らの能力の調査・分析・開発にも情報機器が活用されている。そしてその中でライブラリアンが専門性を生かした役割を果たしていることを感じた。

その確立された、あるいは確立されつつある専門的な役割とは何か。教科と教科の間にあり探究学習では必要とされる教育の領域をライブラリアンがきめ細やかに紡いでいる。読書（読解）指導、メディア活用の支援と指導（情報リテラシーの育成）などの領域でのメディアスペシャリストとしてのライブラリアンの役割である。そしてその役割が校内で認識されていることを感じた。これは、時代の流れにも関係していると思う。情報社会といわれる今日、学ぶ方法も多様化し、学んだことを発表することも重要とされ、その方法も多様化している。メディアの専門家として個々の児童・生徒に対応し、かつ多様化に対応できる教員として、ライブラリアンの役割が確立しつつあるように思った。翻って、日本では司書教諭と教科教員との協働での互いの専門領域や司書教諭と学校司書の業務領域の曖昧さにより、本来ならメディアスペシャリストとしての役割を果たす司書教諭の影が薄い。

最新のアメリカ学校図書館基準に、学校図書館やライブラリアンに対しての共通する考えとして以下が挙げられている。

共有する信念 (Common Beliefs)

- 1 学校図書館は、学習コミュニティにおいて独自で不可欠な存在です。
- 2 資格をもった学校図書館員が先に立って、機能的な学校図書館を実現します。
- 3 学習者は、大学進学、キャリア、人生への準備をする必要があります。
- 4 読むことは、個人的な能力と学力の中核をなしています。
- 5 知的自由は学習者すべてがもつ権利です。
- 6 情報テクノロジーは適切に統合され、公平に入手できるものでなければなりません。¹⁾

ここにあげられていることは、従来の役割、例えば、図書館の運用に関わる所蔵資料の管理と運用、設備・備品の選定や更新、印刷資料へのアプローチの仕方の指導、読書指導などを決して疎かにしているのではない。本質はぶれず、社会の変化に対応して新たにライブラリアンの役割を更新・付加している。そして、役割は資料の管理・提供から利用者と向き合い、支援・指導する領域にシフトするようになったのである。

同志社女子中学校・高等学校に司書教諭として在職中、カリキュラムマネジメントまで潤滑におこなえ達成感のある教科教員との協働から、補佐的なことしかできず司書教諭の役割に限界を感じる授業支援も経験した。日本でも授業がもっと思考力・判断力・表現力を鍛えるものになるならば、一人一人の児童・生徒の自主性に即した学びの場を提供し彼らの活動を支援・指導する司書教諭は、選択したメディアで児童・生徒がどのようなことが分かるか、選択したメディアは使用する学年に適したものか、また使い方にスキルは要るか、そしてそのメディアを使用する際の法的な問題はないかなど様々な局面で、教員と情報を密に共有できる。その過程で、教員は一人一人に対応した読解力や情報リテラシーの指導や支援が肝要であることをもっと実感するであろう。その時、司書教諭はもはや教科担当者の補佐的な役割としてではなく、他の教員と同等の存在として認識されるのではないだろうか。と同時に、司書教諭には高い資質の専門性が要求されるであろう。日本では、まだ未来形、あるいは仮定形の話であるが、1 回目の講師は、既にライブラリアンの存在を職場の中で認識させ、ライブラリアンの役割を多角的に果たしている。2 回目の講師は、読書教育というライブラリアンの役割の一つから彼女の存在を校内で浸透させ、自らを必要とされる存在にしている。ここを突破口に、彼女もライブラリアンとしての役割を多角的に果たし、図書館の環境を整えていこう。3 回目の講師は、兼任であることにより、他の教員とコミュニケーションを図り、教員の一員であるというポジションを突破口に、各教科などを結ぶハブの役割を果

たすライブラリアンとしてさらに、学びの場の図書館を充実していこう。そのことを深く感じた。

全3回いずれのフォーラムのライブラリアンからも、ライブラリアンのあり方を見せてもらった。海外の実践を身近に感じられ、新鮮で元気をもらえるワークショップを含んでいた。

¹⁾ American Association of School Libraries. *National School Library Standards for Learners, School Librarians, and School Libraries*. American Library Association, 2018, p.11. および、「Standards Framework for Learners 邦訳公開サイト」2018, <https://sites.google.com/rikkyo.ac.jp/aasl2018standards/>, (参照 2019-01-15) .